

灰の水曜日

2019.03.06

マタイ 6・1-6、16-18

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高

「今や恵みの時、今こそ救いの日」。今日の灰の水曜日から始まるこの四旬節が、わたしたちにとって、コリントの教会へのこの使徒のことばのとおり、「恵みの時、救いの日」となることを願って、祈りのうちに、ともに呼びかけられている回心の道を歩んでまいりたいと思います。

回心とか四旬節の務めということばを聞くと、何か暗く、重苦しい印象を受けるかもしれませんが、四旬節の本来の意味は、今この時も神から与えられている恵み、神がその御子、イエス・キリストを通してわたしたちに与えてくださった救いの恵みに立ち戻ることにあります。何故、このような四旬節の時がわたしたちにとって必要なのかと言えば、普段の生活の中で、わたしたちがカトリックの信者として受け入れたこのような恵みのありがたさを十分に味わうゆとりを持つことが困難だからです。「神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません」と使徒は言いますが、次から次へと押し寄せるようにわたしたちの心を締め付ける生活の重荷が、いともたやすく、洗礼の時にいただいたわたしたちの信仰の灯火を吹き消してしまうからです。

四旬節は、わたしたちのカトリック信者としての信仰に立ち戻るための回心の時です。わたしたちの心にカトリック信者としての信仰の灯火を再び燃え上がらせるための恵みの時です。そして、わたしたちのこの信仰の灯火は、神のわたしたちへの愛の炎に触れることによって、わたしたちのうちに灯されたいのちの灯火です。それゆえに、わたしたちのカトリックの信者としての信仰への回心は、わたしたちに示されている神の愛に向かった回心です。神はわたしたちへの愛を、イエス・キリストの十字架死と復活によって示してくださいました。そこにわたしたちの回心が目指す、神の愛の懐が開かれているのです。その懐に再び抱き取られるようにして、神の愛を味わうことが四旬節の目指す、わたしたちの回心であるのです。

「神と和解させていただきなさい」とコリントの教会への手紙の中で使徒はわたしたちにも勧めています。神と和解させていただくとは、イエス・キリストの十字架において示されている神の愛に立ち戻るということです。神との和解は、わたしたちが申し出る前に、神の方からわたしたちに向けて差し出されている和解の手を握ることに掛かっています。神はイエス・キリストの十字架に

おいてわたしたちに和解の手を差し伸べておられるのです。

神がこの世界をその愛によって創造されたのなら、何故この世界にはこれほどの不条理な痛みがあるのか、神が全能の父であるなら、何故神はわたしたちからこのような痛みを取り除いてはくださらないのか。神が本当におられるなら、何故神はご自分をこの世界に示してはくださらないのか。神への信仰を宣言し、キリスト者になっても、むしろ、神を信じる者であるがゆえに、わたしたちの心の奥底には、このような神へのうらみつらみがどす黒く澱んでいます。そして、わたしたちのこのような心の奥深くの神への叫びは、神には届くことがないと決め付けてしまっています。しかし、果たしてそうなのでしょうか。神はわたしたちのこのような心の叫びに、耳を閉ざして、知らぬふりをなさっておられるのでしょうか。あるいはそもそも、わたしたちが信じてきた神などおられないということなのでしょうか。そうではありません。イエスの十字架のお姿は、わたしたちの積年の、神に対するうらみつらみの責任を神自らお取になってくださる、神のわたしたちへのこれ以上にはない愛の誠意の証なのではないでしょうか。

このことが分かるためには、わたしたちは神の御前にあって、自分が何者であるかを顧みる必要があります。この四旬節の始めに額に灰を受けるのはそのためです。「あなたは塵であり、塵に帰ってゆくのです」。灰の式の中で司祭が告げる、このわたしたちの現実の真理を受け入れることが出来る時、わたしたちの側からの神との和解のための条件が整うのです。神はわたしたちには及ばない高みにあって、和解の手を差し伸べようとしておられるのではなく、いずれは塵に戻るわたしたちのもとにまで来てくださり、イエスの十字架の死を通して、やがては地上の生活のおごりの全てを奪われ、死に行く者としてのわたしたちに和解の手を差し伸べてくださっているのです。あなたの痛みを取り去らなかつた代わりに、わたしもあなたの痛みの全てをあなたとともに担っていることを分かって、ここイエスの十字架のもとでわたしと和解してほしい、神はそうにして、わたしたちに和解の申し出をしてくださっているのです。神に背き、その罪のゆえに樂園を失った人間が築き上げてきたこの世界においては、神と人との和解はこのようにしてしか実現し得ないのです。「神と和解させていただきなさい」使徒のこの勧めを聞き入れることが出来た時、わたしたちは自分が和解させていただいたお方がどのようなお方であるかを真実知ることが出来ることでしょう。

神がいてくださっても、この世に救いはないことをわたしたちは受け入れなければなりません。イエスの十字架の死が、わたしたちにそのことを示しています。けれども、イエスの十字架は、この世に救いが無いことを呪うわたしたち全ての者に対する神の謝罪であり、和解の申し出です。差し出されたこの神

からの和解の手をわたしたちが握り締めることが出来た時、神から見捨てられた者のように十字架の上に死んだイエスを死者の中から復活させられた、神の絶大な力をわたしたちもこの身において知ることが出来るのです。神と和解させていただくのはそのためです。いやむしろ、神がイエスの十字架においてわたしたちに差し出しておられる、これ以上にはありえない愛の和解の申し出はそのためであるのです。

このことが本当に分かったら、せめてこの四旬節中、わたしたちは自分の心の小部屋に身をおいて、そこに語りかける神の呼びかけに耳を澄ますことが出来ることでしょうか。預言者が言う、「お前たちの心を裂け」ということがどういふことであるかが分かってくることでしょうか。この世の苦しみにあえぐわたしたちのために、ずっと以前からその心を裂き続けておられる神の愛の呼びかけを、裂かれた心になって受け入れることが出来ることでしょうか。神とわたしたちの双方がともに裂かれた心と心を通わせあうことが出来る時、わたしたちの神との和解は成立するのです。そのような恵みを願ってこの四旬節の間、わたしたちの心の小部屋のイエスの十字架の前に身を置くようにしたいと思います。